保守のリハビリテーション

以前、別のところで、「保守／革新」「右派／左派」という言い方はそれぞれ相対的なものでしかないと書いたことがある（野上元「フラットな板と「ウヨサヨ」ゲーム」遠藤知巳編『フラット･カルチャー 現代日本の社会学』せりか書房、2010 年）。例えば右派（あるいは左派）を政治的･言論的闘争で絶滅させたとしても、残った左派（あるいは右派）のなかの右（あるいは左）寄りの立場が新しく右派（あるいは左派）になるというだけのことだ。同様に「保守／革新」の関係も相対的であり、お互いの存在が手応えになって自らの存在意義を確認しているというところがある。

それを前提にしつつ、今回は「保守のリハビリテーション」と題して、「体感する歴史」をめぐる思索を続けよう。回を変えて「革新のリハビリテーション」も論じるつもりである。

さてこれは社会学という学問がそうさせるのだと思うのだけれども、世の中の変化（や変わらなさ）を考えるとき、常に相反する二つの立場を考えてしまう。それは、「別なものへの可能性」を望みつつ、「かくあることの根拠」にも思い至ってしまう矛盾した認識のことだ。

様々な問題を抱えつつなかなか変わろうとしない＜現在＞にもどかしさを感じつつも、一方でどうしても、制度であれ慣習であれ、そのようになってきた経緯があり、そのなかで私たちがそれなりに安心して暮らせているということにも目が行ってしまう。いくら否定的に見えたとしても、やはり＜現在＞には、簡単には変えようのない、それなりの重みがある。（そしてそう感じつつも、それでも、と思い続けることができれば、ちょうどその分だけ重厚な改革案が生まれることだろう）

あるいは、つぎのような経験はないだろうか。あるやり方が制度疲労を起こして変えなければいけないというように見えたとして、現状を変えるためのアイディアを何か出してみて、それを少し自分でチェックしたり、その「謂われ」を知る人に聞いたりしてみると、旧いやり方にそれなりに意味があり、これまでずいぶん機能してきたことに気づくという経験。あるいは会議などで「改革」が声高に叫ばれ、素晴らしいアイディアが示されたような気分になるが、結果は無責任に現場を混乱させ、何かが成功した裏で（成功すればまだ良いけれども）べつの面倒が生まれ、さらに波及効果でうまくいっていた部分をも破壊してしまうだけだったという経験。

べつの言い方をすれば、現存の秩序において最適化がかなり進んでいて、そこに加えられる改革は、ある部分に恩恵をもたらすと同時に別の場所に不具合を生じさせるということだ。経済学などではよく議論されている。結局、私たちが目にしている様々な「改革」は、全員が一挙に得をするというものでは到底なく、むしろある理念や利害に添った損得の「付け替え」であるということを表している。世の中は非合理的なことばかりのように

みえて、意外とうまくできているということだ。問題意識によっては、世界や社会をそう観ることもできる。

それを前提にしたうえで、「保守のリハビリテーション」がここで論じられるのは、「保守」こそが、歴史を大事にする立場だと思うからである。それはつまり、変化あるいは進歩によって何か失ってはいけないものが損なわれつつあるという立場のことである。私たちの世界には、古き良きもの、つまり伝統があるというのだ。古きものの全てが悪しきものだとする世界の見え方、進歩を目指す改革を続けてゆくことこそが大事だとする「革新」の立場とは相容れない。

こうした保守の立場の特質である、「(望ましくないものとしてであれ）変化に敏感であること」は、歴史への感受性に繋がるのではないか。

この連載は、あくまでも「歴史を体感する」技法や感性の開発や触発を目指している。「保守／革新」の違いや「右派／左派」の違いをそれほど重視していないし、先に述べたとおり、定義上相対的になっているのだとすれば、どちらが正しいと言うつもりもない。そんなことよりも、この社会で「歴史」を今後どうするのだ、ということを問題提起している。

そのためには、まず「保守」こそ注目する必要がある立場だと考えている。そこには、「歴史を体感する」ためのノウハウが溢れているに違いない。まずはそれを謙虚に学ぶことにしよう。

ところが現在、保守の立場においても、よいアイディアに基づく改革が魔法の杖のように世界を全てを一瞬でよくしてくれるのではないかという考え方が顔を出しているようにみえる。

変わらないことへの愛着（とそれに伴うあきらめ・納得、そしてその後に垣間見えるかもしれない希望）といった社会観･歴史観ではなく、その批判する「進歩」「革新」に近い、社会を設計主義的に操作してゆこうとする立場をみることができる。これは「保守」の自己矛盾ではないのか。

ただ先取りしていってしまえば、この社会において、純粋な保守はすでに相当なまでに不可能になっている。

「江戸に戻れ」という保守はさすがにいないだろう。この国の保守の原点は明治維新にある。それは古代を理想化しつつも、結局は同時代の西洋を鏡とする改革であり、とてもアイデンティティのない、人工的なものだ。社会に対する設計主義は、むしろ保守が理想化している明治にこそあったとするべきだろう。それは仕方がない。

そうだとしても、明治維新以降ですら、維新とか革命という言葉で区切られる決定的な一撃こそなかったものの、改革･改良は不断に不可逆的に進んでしまっている。

大体、平成も 20 年を超えて「平成維新」と言っているのが遅すぎるのだ。西南戦争の頃を区切りとすれば、明治維新は明治 10 年くらいまでで終わり、「昭和維新」の運動も 1930 年代前半までの 10 年くらいの動きだった。「維新」をどう体感するか、それはそれで問題である。

あるいは、決定的な敗戦と、アメリカの軍事力を背景にしてなされた占領改革。これを戦後全ての設計主義の原点とみるあり方が「保守」にはある。けれども「戦後」も 70 年あれば、それなりに歴史の厚みを持つものだ。そうした厚みを特定の政策（例えば学校教育の内容）によって除去･改変できるとすれば、それはかなり操作主義･設計主義である。

ただ一方で、そうした空想的な保守の立場はむしろ時代に取り残されているようにみえる。歴史をめぐるあるやり方によって、「保守のリハビリテーション」は近年かなり「成功」しつつあるともいえる。それを次回では検討することにしよう。